枇杷の實も應擧描けりとおもふときひとつび
とつに胸もこそ鳴れ

常信の卷狩の繪のたうとさに涙ながしぬ旅び
とわれも

常信の古き繪屏風見てあれば旅の愁ひもいつ
か忘るる

その八

昭和九年四月、われふたたび土佐に入りぬ。山嶮しく海荒しといへども、この地の人ごころの直ぐなることは、げにうるはしき埴安の郷のここちこそすれ。片雲の風にさそはるる身も、いでやここにささやかなる廬を結ばめと思ひ定めぬ。

四國路へわたるといへばいち早く遍路ごころ
となりにけるかも

おもひ出でて胸こそふるへ薩摩路へくだりし
海の初旅のこと

土佐の海のゆたのたゆたにただよひてあらば
かよけむ海月なす身は

海にしてはるばる見れば大土佐の魚梁瀬の山
はなつかしきかな

土佐の海に勇魚を見ざる寂しさはなほわがま
へに酒なきがごと

浪速津を出でてひと夜の船路はて浦戸湊にい
まかちかづく

吾妹子と呼ぶべきひともあらなくにまた來つ
といふ思ひかなしも

去年の夏うち親しみし土佐の土ふたたび踏む
と思ひがけきや

空海をたのみまゐらす心もてはるばる土佐の
國へ來にけり

大土佐の韮生山峽いや深くわれの庵は置くべ
かりけり

卷五

土佐の國猪野々の里にて詠みける歌

その一

猪野々なる山の旅籠(はたご)の夕がれひ酒のさかなに
虎杖(いたどり)を煮る

うちひさす都びとよりよしとして深山(みやま)百足(ひかで)に
親しみにけり

大土佐の猪野澤の湯はかしこしや大師の獨鈷
や落ちて湧きけむ

かなしきは人のゆくすゑこの夏も奈翁の傳を
讀みて泣かまし

黄ばみたる疊のうへにかしこまりひたぶるに
讀む奈翁の傳を

去年の夏の猪野々籠りをおもふとき古疊さへ
なつかしきかな

この夏は百足を友としてあらむ蟲はいとほし
人はけうとし

うつらうつらものを思ひてあるほどに猪野々
の里に夏は來にけり

物部川の針金渡舟うちわたり安岡巡査きたりけるかも

去年の夏の禮申さくと言ふごとくあなやはやくも百足出で來ぬ

旅役者養蠶教師泊りゐて猪野澤の湯の宿はおもしろ

しづけさは浿槃のごとし大土佐の韮生の峽にわれや眠らむ

物部川鎖渡舟の音冴えてたそがれ時となりにけらしも

物部川の水音たかしことありて薫的和尚雨降らします

石楠の杖はかしこし御在所の山ふかく得し珍
の杖とふ

山ゆけば忽ちすずし石楠の杖のさきより雲立
ちのぼる

すべてわがあやまちとしてあらましと思ひて
籠る土佐の深山に

うつうつと障子も閉めてこもるなり末法の世
の風をいとへば

寂しさに堪ふることにもいつか馴れひとり山
居をたのしむわれは

おろそかにあらぬ山居と思へばかいとど命の
いとほしきかな

母刀自の老をおもへば涙落つ消息もせで旅に
過ごせど

いささかの酒ありがたし空海の慈悲かしこや
と酌みたてまつる

われ醉へば杯のなかに聲ありて喝とするどく
おらびけらずや

醉ひ臥やる土佐樊噲の太腹もこのごろとみに
細りけるかも

母刀自の老のおもかげ夜目に見ゆ酒な飲みそ
と言ひたまふごと

あへぎあへぎ韮生山路をのぼるなりこの頃し
るき衰へあはれ

名は知らね大山祇もたうべます靈藥として山
草を食む

山のもの食めば身ぬちも澄むおもひ本草綱目
讀まむとぞ思ふ

石に坐し雲をながめてあるほどに羅漢ごころ
となりにけらしも

かくばかり弱きこころを癒すべき藥草なきか
土佐の深山に

やがてここにわれや死ぬると思ふとき猪野々
の里も野ざらしの里

野ざらしの姿とや見むさすらひの身を歎きわ
び醉ひて臥ればこや

その二

しんしんと山峡の夜は更けたれど心いたみて
眠られなくに

山風よ韮生の峡にわれありていきどほり酒酌
むと告げ來ね

われとわが身をいとほしみ言へらくは酒は飲
むとも醉泣なせそ

あしびきの山こもり居のわがためにうま酒も
て來伊野部酒麻呂

夜ごとに酒麻呂の酒酌みながら百足の宿に安
居すわれは

あらはには笑ぎたはむれ酒酌めどわれ醉ふご
とに下ごころ泣く

おほらかに醉ひもこそすれ都なるへろへろび
とは見むと思はず

醉ひ臥して仰寝をすればいつとなく涙あふれ
てきたりけるかも

にごり酒破竹虎杖乾ざかなありてたのしも山
の夕餉も

雲を見てうま酒酌みて一生經む御在所山の山
禰宜のごと

この秋は四國遍路のこころざし果さめと思ひ
山こもり居り

世のひとらわが落魄をさげすみてあるともよ
しや山に果つべし

まこと己が命しみじみ泣くべくば夜の蟬とも
なるべかりけれ

法界の火を焚くころも近からし韮生山峽夏ふ
かみつつ

憤ろしきこと思ひつつ眠ればか國定忠治夢み
けるかも

夏蟲の火蟲のごとくいさぎよく命やすやす棄
てむとぞ思ふ

うつし世になごりの歌を書かなむなど思ひつ
つ摺る墨にやはあらぬ

ちちのみの父のなげきに堪へ居れば額の皺も
深くなりにき

世にそむく心はげしくなりにけりひとり見つ
むる夜天の星を

堪へかねし虚無のおもひに戸開くれば闇こそ
あなれ隠密のごと

ため息を洩らして筆を抛ちぬいまの思ひは書
くすべもなし

蛾を殺し百足を殺す殘虐を夜ごとするなりい
らち心に

世にそむくかたくな心持つゆゑに鬢こそ白め
月に日にけに

その三

半跏してものを思へばいつとなく吾も居士顔
となりにけらずや

世にそむき人にそむきしいやはての落魄なれ
ばおもしろきかな

うつうつとものを思へばうつし身も日ごと夜
ごとに鬢白みゆく

友のごとなつかしきかもものの思ふ夜半の壁に
うつる己が影

ほそぼそと山に煙の立つごとくわれもこの世
にほそぼそと生く

ほのぼのと死をなつかしむ思湧き山の深夜の
しづかなるかも

われ山の行者ならねど夜ごとに懺悔懺悔と申
しけるかな

ほのぼのと涅槃を戀ふるこころもてねむり藥
に親しみにけり

世を棄てむと思ひ極めて食うぶれば夜半の寢
酒も寒くさふらふ

いまごろは吾子はやすけく眠るらむ遠ゐる父
はいまだ寢なくに

起き出でて深夜の窓をひらきけり胸苦しさの
堪へられなくに

夏ながらねむり藥がしらじらとこぼれて寒し
夜半の机は

寢苦しやいきどほろしや寂しやとうつし身な
れば歎きもぞする

殺したる蛾のむくろにもしら玉の女身をおも
ひおびえてぞ居る

破れ帳は釣らずもよしや夜をひと夜維摩のご
とくもの思ひゐむ

過ぎし日の華奢も夢かとおもふとき艶隱者め
く寂しさの湧く

われとわが野晒し姿まざまざと目にこそうか
べ夜半のまぼろし

去年今年友や幾たり死ににけむ夜はかかるこ
とのみを思へる

こまごまと死後のことなどしたためて封じて
題す癡人の書と

堪へがたし疾く夜明けよといふ叫び聲には出
さねすさまじきかな

いきどほろしく百足殺してあるほどに土佐の
山峽夏去りにけり

あしびきの石槌山の山精進いまだせなくに夏
去りにけり

机邊小吟

跋に代へて

夜ふかく古鉛筆の削り屑塵籠に棄ててこほろぎを聽く

古硯夜の机のうへに置き片減りしたる墨をいとしむ

ひさびさに世に出すべく机邊に置く原稿の寂しさも知る

机邊にあぐらゐ居れば思ふことやうやく淡く水のごとしも

昭和丙戌晩秋、城南形影相憐處にて

相聞老癡　吉井勇

昭和二十二年八月廿五日　初版印刷
昭和二十二年八月三十日　初版發行

歌集人間經

定價　六拾圓

著作者　吉井勇（ヨシイ　イサム）
發行者　角川源義　東京都杉並區天沼二ノ五二二
印刷者　內田作之輔　東京都世田谷區祖師谷町二ノ一二二六
發行所　角川書店（カドカハ　ショテン）　東京都杉並區天沼二ノ五二二會員番號A二一一〇〇二振替東京一九五二〇八

大和印刷株式會社印刷

飛鳥新書